

生活場面の活動の発達①

遊ぶことの発達

国内唯一、「子どものリハビリテーション専門誌」第8弾

12月15日刊行！ 特集は「生活場面の活動の発達」

株式会社ともあ(本社：愛知県名古屋市、代表取締役：直江 久美、以下ともあ)は、「障がいではなく子どもをみる」という視点に立って、小児とご家族の生活に対する支援までを考える雑誌『小児リハビリテーション』vol.8を2020年12月15日より刊行いたします。本誌は、小児を担当するセラピストへの情報だけでなく、「みんなで『一緒に』子育てをする考え方」を提唱し、子どもを支えるために必要な考え方や支援の方法をお伝えする、国内唯一の小児リハビリテーション専門誌です。

▼書籍のサイト▼

<https://tomoa.co.jp/SHOP/J-SR-S008.html>

※メディア様への献本可能です。ご希望の場合お問い合わせください。

■書籍の内容

【 - 今号特集：「遊ぶことの発達」 - 】



本号では7人の療育に関わる幅広い職種の方々から、遊びと発達について紡いでいただきました。遊びの生活における範囲はとて広いと多職種となるのは必然ですが、楽しさの追求という共通点の一貫性と、遊びの人的・物的・諸環境条件の多様性について改めて気づいているところです。どうぞ、最後まで遊びの楽しさと多様性について共に考え、療育における遊びの大きな位置について考えてまいりましょう。それらのお考えが療育の実践に資することができればと念じております。子どもたちが楽しく満足して遊ぶことができることを願って。(巻頭言より)

■编者メッセージ

子どもたちの生活を支えていく上では、目の前の子どもの発達の状況を捉え、将来の成長を見通した関わりが必要となってきます。

本号から、「生活場面の発達シリーズ」と題し、生活支援の軸を「遊ぶこと」、「たべること」、「はいせつ」、「外出」、「睡眠と生活リズム」などに分け紹介していきます。

■目次

(巻頭言) 遊ぶことの発達

執筆：群馬パーズ大学 保健科学部 理学療法学科 学科長 教授 理学療法士
中 徹

【巻頭 INTERVIEW】

こどもと共に～ダウン症候群～

【特集】

○時間軸でのアプローチ

～太田ステージ理論による子どもの発達の評価～

群馬パーズ大学 保健科学部 教養共通教育部 准教授

公認心理師 臨床心理士

榎本 光邦

○おもちゃの使い方

～おもちゃの役割と子どもとの関わりについて～

有限会社キッズいわき 代表取締役社長

岩城 敏之

○子どもと音楽あそび

～発達障害をもつ子どもたちとの音楽あそびの経験から～

金城大学 社会福祉学部 子ども福祉学科 教授

日本音楽療法学会認定音楽療法士

中 磯子

○乳幼児期の遊びについて保育者として大切にしたいこと

～遊びの発達と評価スケールから～

愛知みずほ短期大学 現代幼児教育学科 助教

加藤 望

○重症心身障害児と遊び

重症児・者福祉医療施設 ソレイユ川崎 リハビリテーション部 部長

作業療法士

岸本 光夫

○遊ぶことを支援する

～遊びの本質と発達を踏まえて～

作業療法士

中路 純子

○発達相談と遊び

～言語聴覚士の視点～

旭川大学短期大学部 幼児教育学科 准教授 言語聴覚士

子どもの発達支援を考える ST の会 副代表

熊田 広樹

【症例報告】

口腔機能発達不全症を伴う高機能自閉スペクトラム症児に対する

口輪筋トレーニングの効果

第2 北総病院附属小児リハビリテーション事業所かざぐるま

(福祉型児童発達支援センター・放課後等デイサービス)

言語聴覚士

本間 友美 ほか

【巻頭特集】

[今伝えたいこと] 自分らしく生きるために

～誰もが自分らしく生きていける社会を願う～

■今後の展開

【次号特集：生活場面の活動の発達②「たべることの発達」】

成長に欠かせない食事ですが、子どもたちの健やかな成長を支えるには、栄養だけではなく、食に関する環境全体を見通した関わりが必要となってきます。次号では、食形態から口腔機能、味覚の発達や食動作・姿勢まで、多角的な視点で「たべること」を捉え、子ども達の成長の見方と関わり方をお伝えします。

【本書概要】

■タイトル：小児リハビリテーション vol.08

■発行日：2020年12月15日

■発行元：株式会社ともあ

■価格：¥2,750 (税込)

■年間購読価格：¥7,500 (税込) 年3巻 (次号は2021年3月発行)

■判型・ページ数：B5判・108P

■ISBN：978-4-910393-33-9

■会社概要

商号：株式会社ともあ

代表者：代表取締役 直江 久美

所在地：〒461-0004 愛知県名古屋市東区葵1丁目26番12号

IKKO 新栄ビル 6階

設立 : 2020年7月1日
事業内容 : コメディカルスタッフ対象の出版事業
資本金 : 650万円
URL : <https://tomoa.co.jp/>

■ 本件に関するお問い合わせ先

企業名 : 株式会社ともあ
TEL : 052-325-6618
Email : publisher@tomoa.co.jp

巻頭INTERVIEW

子どもと共に

将来を
見つけて

あなたが初めて話す言葉は何ですか？
あなたの好きな食べ物は何か？
将来の夢は何ですか？

あなたはあなたのままで大丈夫。
あなたがいてくれるだけで、
あなたの笑顔が家族の絆を深めてくれる。
ありがとう。大好きだよ！

7

ダウン症候群

——長期の入院後に、訪問でもリハを取り入れるようになったとお伺いしました。きっかけを教えてくださいませんか？

お母さん 病院で、月に1回の通院時にリハビリテーションを受けていましたが、お休みをすると数ヶ月も受けられないこともあり、定期的にリハを受けられる方法はないかと思っていました。自分自身で調べてみると、同じダウン症の子でも成長の差は大きくて、Sくんと同じ月齢の子でもどんどん先のステージに行っているのを見ると、すごく心配になりましたし、手術して長い期間入院していた分、出遅れているなという思いもありましたので、当時はとても焦りがありました。

利用者：Sくん 2歳 男児
疾患名：ダウン症候群、
先天性心疾患、呼吸障害
家族構成：両親、兄、祖母と5人暮らし

当事者特別 INTERVIEW

今伝えたいこと

広大な宇宙から見れば、
私たちの存在も抱く悩みもちっぽけなもの。
しかし人間は「小さな宇宙」とも表現されています。
誰もが潜在的な能力と可能性を秘めています。
各々が人生劇場の主人公として、
ドラマチックに人生を歩んでまいりたい。

——稲葉 政徳
理学療法士（広汎性発達障害）

当事者特別
INTERVIEW

自分らしく生きるために



誰もが自分らしく
生きていける社会を願う——

診断がついていても、いなくても、
学生本人の困りごとを見つけ出し
サポートする



生い立ち 出生～現在

0歳 ～ 15歳	埼玉県秩父市にて4人兄弟の長男として生まれる。幼少期より、風貌をからかわれ、発達障害の特性から理不尽な扱いを同級生だけでなく担任からも受けていた。（当時は、発達障害とはわかっていない）
16歳 ～ 18歳	高校生時代（農業高校）バンド活動を初め、ベースやボーカルに打ち込む。役割や目標などをバンド仲間と共有し、活動を通してライフスキルを磨く。バンドの機材はバイトで賄う。
19歳	就職 仕事が覚えられないことやミスが多く、毎日のように上司や同僚から叱責を受け、わずか2カ月でやめる。
20歳～21歳	国士舘短期大学国文学科
23歳～26歳	日本カイロプラクティックカレッジ
31歳～34歳	中部リハビリテーション専門学校 理学療法学科 PT 資格取得
43歳～46歳	畿央大学大学院 健康科学研究科 修士課程

当事者紹介

稲葉 政徳 55歳／男性
岐阜県保健大学 短期大学部
リハビリテーション学科
講師／理学療法士
広汎性発達障害

趣味

ギター演奏、
音楽用のこぎり演奏
（ミュージカル・ソー※）

※音楽用西洋のこぎりです。
弓やマレットなどを使用する奏法。



〈特集：生活場面の活動の発達 ①遊ぶことの発達〉

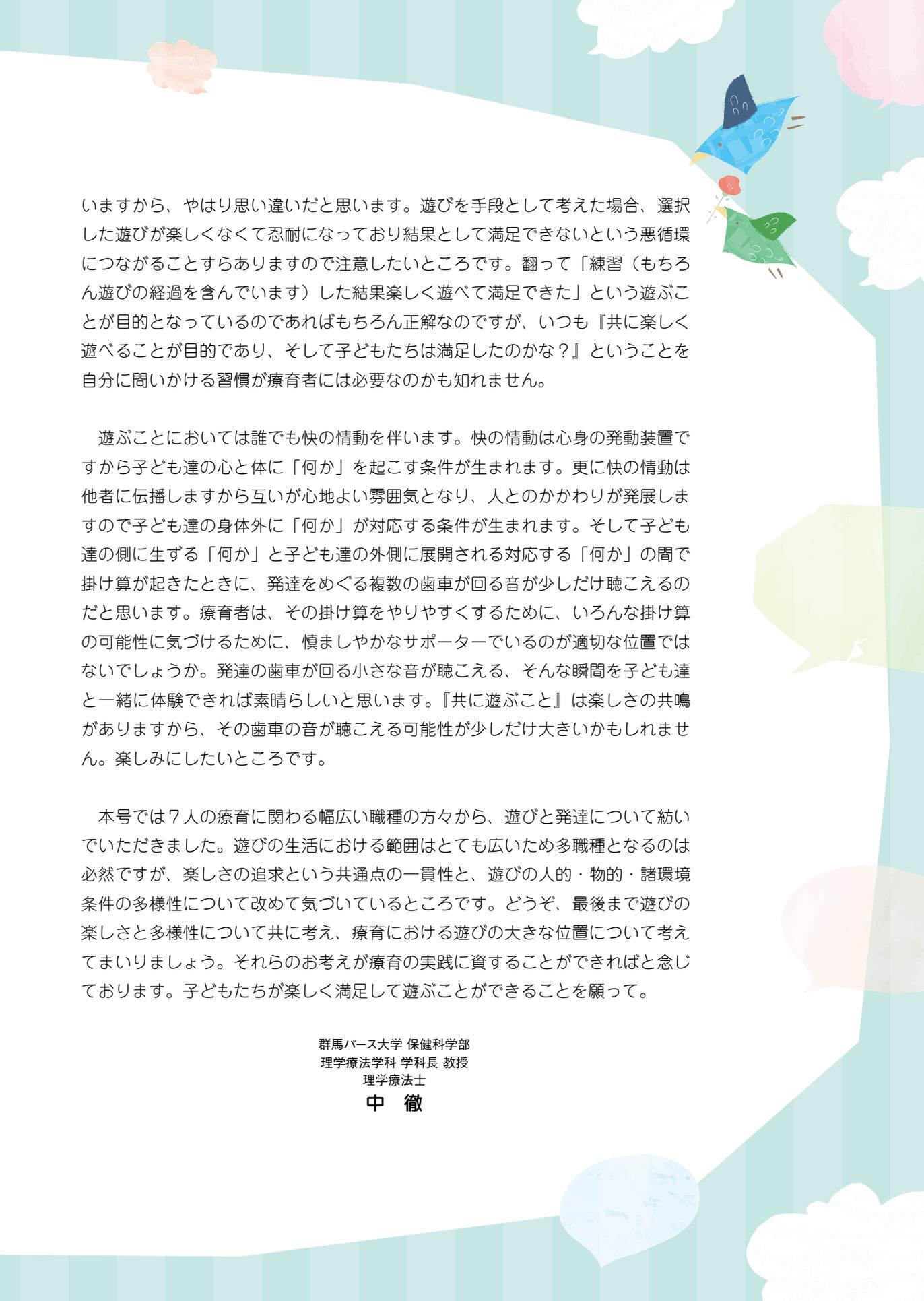
楽しく遊んで 満足できますように

心身の発達過程において遊びは変化してゆきます。その変化は遊びの発達と言うことができます。心身の発達が遊びを変化させるのか、遊びの変化が心身の発達を進めるのかは、鶏が先か卵が先かという命題の解を求める論議のように、その因果律に明解な結論があるわけではありません。しかしながら、子ども達が遊びを変化させることと心身の発達は同時に起きていますから、因果律の吟味は少し置いておいて、それらは互いに影響しあっているため子どもの発達においてどちらも大切と思うことで療育をすすめているというところだと思えます。ですから、療育を進める人たちは心身の発達を支えることと、遊びの発達を支援することを同時に行っています。

ここで、発達を支援する療育において遊びをめぐる時折に思い違いがあることがありますので、少し立ち止って考えておきたいと思えます。

「子ども達の療育は遊びを取り入れて練習をする」というよく聞く表現について考えてみます。この表現は、『療育では子ども達が生活の多様な場面で遊ぶことができるように療育で支援する』ということに真意があります。子どもの生活における活動のほとんどは遊びの要素を伴っていますから、療育の目的はそれぞれのお子さんの状況に合わせて楽しく遊んで満足できる体験することとなります。すなわち、「楽しく遊んで満足することが療育の目的」となっていることが本来の療育における遊びの在り方といえます。

しかしながら、療育を進めるための具体的な手立てを療育に携わる人が考えるときに、「遊びを使って練習する」という表現をしてしまいがちです。その根底には「楽しく練習するため」という狙いが込められてはいるのですが、実際には練習がうまくいくことを目的として「遊びを療育の手段」として捉えてしまって



いますから、やはり思い違いだと思います。遊びを手段として考えた場合、選択した遊びが楽しくなくて忍耐になっており結果として満足できないという悪循環につながることもありますので注意したいところです。翻って「練習（もちろん遊びの経過を含んでいます）した結果楽しく遊べて満足できた」という遊ぶことが目的となっているのであればもちろん正解なのですが、いつも『共に楽しく遊べる』ことが目的であり、そして子どもたちは満足したのかな？』ということを自分に問いかける習慣が療育者には必要なのかも知れません。

遊ぶことにおいては誰でも快の情動を伴います。快の情動は心身の発動装置ですから子ども達の心と体に「何か」を起こす条件が生まれます。更に快の情動は他者に伝播しますから互いが心地よい雰囲気となり、人とのかかわりが発展しますので子ども達の身体外に「何か」が対応する条件が生まれます。そして子ども達の側に生ずる「何か」と子ども達の外側に展開される対応する「何か」の間で掛け算が起きたときに、発達をめぐる複数の歯車が回る音が少しだけ聴こえるのだと思います。療育者は、その掛け算をやりやすくするために、いろんな掛け算の可能性に気づけるために、慎ましやかなサポーターでいるのが適切な位置ではないでしょうか。発達の歯車が回る小さな音が聴こえる、そんな瞬間を子ども達と一緒に体験できれば素晴らしいと思います。『共に遊ぶこと』は楽しさの共鳴がありますから、その歯車の音が聴こえる可能性が少しだけ大きいかもしれません。楽しみにしたいところです。

本号では7人の療育に関わる幅広い職種の方々から、遊びと発達について紡いでいただきました。遊びの生活における範囲はとても広いため多職種となるのは必然ですが、楽しさの追求という共通点の一貫性と、遊びの人的・物的・諸環境条件の多様性について改めて気づいているところです。どうぞ、最後まで遊びの楽しさと多様性について共に考え、療育における遊びの大きな位置について考えてまいりましょう。それらのお考えが療育の実践に資することができればと念じております。子どもたちが楽しく満足して遊ぶことができることを願って。

群馬バース大学 保健科学部
理学療法学科 学科長 教授
理学療法士

中 徹

通巻特集

生活場面の活動の発達

①遊ぶことの発達

- 018 時間軸でのアプローチ
太田ステージ理論による子どもの発達の評価
榎本 光邦
- 032 おもちゃの使い方
おもちゃの役割と子どもとの関わりについて
岩城 敏之
- 042 子どもと音楽あそび
発達障害をもつ子どもたちとの音楽あそびの経験から
中 磯子
- 054 乳幼児期の遊びについて保育者として大切にしたいこと
遊びの発達と評価スケールから
加藤 望
- 066 重症心身障害児と遊び
岸本 光夫
- 076 遊ぶことを支援する
遊びの本質と発達を踏まえて
中路 純子
- 086 発達相談と遊び
言語聴覚士の視点
熊田 広樹

症例報告

- 098 口腔機能発達不全症を伴う
高機能自閉スペクトラム症児に対する
口輪筋トレーニングの効果
本間 友美 他

巻頭特集

[今伝えたいこと]
自分らしく生きるために
誰もが自分らしく生きていける社会を願う

- 108 奥付

巻頭インタビュー
こどもと共に



1. 時間軸でのアプローチ 太田ステージ理論による 子どもの発達の評価

群馬パース大学 保健科学部 教養共通教育部 准教授
公認心理師 臨床心理士
榎本 光邦

はじめに

子どもの発達には、個体の生物学的なベースとともに、環境からの働きかけのあり方が大きく関わってくる。つまり、発達は、子どもと環境の相互作用によって進んでいく。子どもの側の要因として、まず、脳機能の成熟と発達が欠かせない。それに加えて、外界に対して能動的、調和的に関わろうとする子どものエネルギー的側面の力が必要である。子どもは外界のものを取り込む「同化」と、外界に合わせていく「調節」を繰り返して発達していく。一方、環境要因としては、特に親や家族、教師、友人などの接し方、働きかけによって強い影響を受ける（永井・太田、2011）¹⁾。したがって、親や家族、子どもの養育・療育に関わる人々が、発達をはじめとする子どもの側の条件を的確に把握し、理解した上で関わるのが重要である。本稿では、子どもの発達を促す遊びを、子どもの発達の段階と時間軸に沿って提案したい。

子どもはなぜ遊ぶのか？

子どもはなぜ遊ぶのかというと、遊びが好きだから遊ぶのである。遊びは、自発的で自由な活動であり、楽しさ、面白さや心地よさ等、快を伴ったそれ自体を目的とする活動である。したがって、生活に必要な現実的な適応行動とは区別される。遊びは古くから、さまざまな観点で分類されてきた。代表的な分類として、心理的な機能に焦点を当てたBuhlerの分類（感覚遊び（機能遊び）・運動遊び（走る／投げる）・模倣遊び（想像／ごっこ遊び）・構成遊び（想像遊び）・受容遊び（動植物・絵本）、遊びの内容に焦点を当てたCailloisの分類（競技遊び・偶然遊び（サイコロ遊び）・模倣遊び・眩暈遊び（渦巻き）、認知発達に焦点を当てたPiagetの分類（機能行使の遊び・シンボル遊び（ごっこ・想像・模倣遊び）・ルール遊び）、遊び方に焦点を当てたPartenの分類（専念しない行動（何もせずぶらぶらしている）・傍観遊び（他の遊びを見ているだけ）・ひとり遊び・平行遊び（他の子どものそばで同じような遊びを展開するが互いに関わり合わない）・連合遊び（他の子どもと玩具のやりとりを通して遊ぶ）・協働遊び（組織的遊び：共通の目標に向けて仲間関係が組織され

- 1) 永井 洋子、太田 昌孝（編）. 太田ステージによる自閉症療育の宝石箱. 東京：日本文化科学社. 2011. p12, 40, 62, 80, 96, 116.
- 2) 橋本 創一、柘 千晶. 保育における子どもの社会性とイメージする力を育てる遊び. ふたば, 2016; 80:3-9.

2. おもちゃの使い方 おもちゃの役割と 子どもとの関わりについて

有限会社キッズいわき 代表取締役社長
岩城 敏之

おもちゃとは何か？

① 良いおもちゃとは何か？

(1) おもちゃ屋に生まれて

私は1956年おもちゃ屋の長男として生まれました。日本が豊かになり、おもちゃを買う余裕が出始めた時代である。子どもの時からおもちゃに囲まれて育ったラッキーな子どもだった。しかし、おもちゃ屋は夢のある仕事と言われる一方、教育の世界では余り良く言われない傾向を感じていた。「沢山与えると物を大事にしくなくなる、既製品のおもちゃで遊ばすと考えない子どもになる、想像力が育たない」と。私を育てた親もおもちゃ屋をしながら「遊んでばかりいるとアホになる！勉強しなさい！」と私を育てたぐらゐであった。後継ぎである私は、おもちゃは大切かどうか悩むことになり、これが私のライフワークになった。

(2) おもちゃの本が無い

おもちゃのことを学ぶため書籍を探すが、手作りおもちゃの書籍は有っても、既製品のおもちゃの意味を教えてくれるものは見つからなかった。教育界では手作りは奨励されても、市販のおもちゃは

研究されていなかった。私が学んだヨーロッパのおもちゃは違っていた。世界で最初の幼稚園キンダーガーデンを作ったフレーベルが恩物（積木）を創作し、キンダーガーデンで使って以来ヨーロッパでは教育者がおもちゃの研究をしていた。後述するが、結果日本と違うおもちゃの文化が作られていた。

(3) 現代にこそ必要なおもちゃの研究

日本の遊びは基本的に外遊び中心に発展したので、室内遊びの研究が少ない歴史がある。その結果、教育者が保護者におもちゃのアドバイスができないためテレビやビデオを中心としたおもちゃ文化が発展したと私は考える。

室内遊びの多い現代においておもちゃは重要だ。脳と身体が成長する子どもには、頭と身体を使う遊びを豊富に与えてあげたい。油断すると視覚と聴覚だけで遊ぶ時間が多くなり感覚を使って世界を学ぶ経験が少なくなる。

3. 子どもと音楽あそび

発達障害をもつ子どもたちの音楽あそびの経験から

金城大学 社会福祉学部 子ども福祉学科 教授
日本音楽療法学会認定音楽療法士
中 磯子

子どもの発達における 生活と遊びと音楽

「子どもが行う行動はすべて遊びである¹⁾」とされ、その遊びとは、「獲得した新しい運動（力）を利用して、環境との相互作用を繰り返すなかで、自らの能力をさらに発展させ、それによって自分の世界を広げ、新しい世界を楽しみ更にはより豊かな世界を体験したくなる繰り返しである（要約）²⁾」といえる。この遊びは、常に運動と情動を伴い、知能や関係性のよい変化を生み出す。なかでも、動きは遊びの中心であるが、夢中になって楽しく快の情動を伴った動きである。

子どもは多くの快を伴う動きを遊びで繰り返し、加えて安定した睡眠をとることから、運動やそれにもなう状況の記憶の定着が進むので、短期間で多くの技能や知識を身につけるといわれる。このことは発達の実態と発達が起きるしくみの一部であるが、快の情動を伴う運動が発達の推進力であることを示している。

音楽は、情動に直接的に働きかけることができるので、音楽が種々の快の情動を惹起させるのであれば、音楽は動くことを促すことができる可能性が高いであろう。音楽が提供できる快の情動による楽しい運動の種類は多様である。歌は、メロディーが短く、歌詞が簡単であれば、

子どもたちにとって記憶しやすく、口ずさみやすく歌に合わせた楽しい動きが生じやすい。ピアノ伴奏つきの歌の場合は、豊かなハーモニー、小さくて柔らかい音や強弱のはっきりしたりリズムカルな音により、ダイナミックな動きの変化を楽しむ遊びに発展することがある。拍子やリズムの変化は、動くタイミングをうまくつかむのに役に立ち、動きの制御や変化を楽しむ運動を促すことができ、立つ、椅子に座る、手を挙げる、手をまわす、ジャンプする、歩く、スキップするなど動きを促進する効果がある。速いテンポのものは、子どもたちの動きを速くし、遅いテンポのものは、動きが遅くなる。音が止んで静かになれば、動きを止める。再び、音が鳴れば、動き出す。子どもたちは、音楽をよく聴いているし、音楽を聴くことが大好きでそれに合わせて動くことが大好きである。

音楽を使って情動の変化を介して「動く」という遊びの重要な部分を支援することができるので、音楽が子どもの発達によい影響を与えるのではないかと考えられる。本稿では、発達障害のお子さんの障害の軽減を目指すことを目的として、音楽あそびの試みを行うことで良好な変化につながった事例について報告し、音楽が発達を促すことのお手伝いができる可能性について考えていきたい。

- 1) 鴨下賢一、遊びの発達、大城昌平、子どもの感覚運動機能の発達と支援、東京：メジカルビュー社；2019、p.124
- 2) 小西行郎、小西薫、志村洋子、第2章 遊び、一般社団法人日本赤ちゃん学協会、赤ちゃん学で理解する乳児の発達と保育第2巻 運動・遊び・音楽、東京：中央法規；2017、p.50

4. 乳幼児期の遊びについて 保育者として大切にしたいこと 遊びの発達と評価スケールから

愛知みずほ短期大学 現代幼児教育学科 助教
加藤 望

保育者の役割と 遊びの評価スケール

幼稚園・保育所・認定こども園では、子どもたちは遊びを通して育っている。保育者は、子どもの遊びを「ただ遊んでいるだけ」とは捉えない。一人ひとりの子どもが「何に興味関心を持ち、どう遊びを展開すると何が育つか」を見据え、環境を設えることによって、その育ちを援助している。では、保育者が援助を行う先にある、「こんな子どもに育ってほしい」という願いとは、どのようなものだろうか。これは、『幼稚園教育要領』、『保育所保育指針』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』に、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として記載されている^{1).2).3)} (表1参照)。

このように幼稚園・保育所・認定こども園では、遊びを通して幼児の教育が行われる。小学校以上の学校教育とは異なり、子どもたちの遊んでいる姿を評価することは難しい。しかし、子どもの遊びを評価することは、保育者の設定した保育がねらいを達成できるものであったか、保育者自身の子どもへの関わりはその子どもの発達に則していたかを振り返る重要な機会である。従って、これらの遊びを評価するためにさまざまなスケールが開発されている。代表的な

ものには、保育環境に視点を置いた『保育環境評価スケール』⁴⁾や、保育過程に着目した『保育プロセスの質』評価スケール⁵⁾がある。その他、子どもの現状を安心度 (well-being) と夢中度 (involvement) で評価するスケール⁶⁾もある。次節以降では、これらのスケールと、実際の保育環境の写真や実践事例と照らし合わせながら、子どもの遊びにおいて保育者として大切にしたいことを紹介する。

子どもの遊びと 『保育環境評価スケール』

ここではまず、実際の保育環境の写真を見ながら、『保育環境評価スケール』を紹介する。

『保育環境評価スケール』は、原著を Early Childhood Environment Rating Scale (ECERS) といい、アメリカで何度もフィールドテストを繰り返しながら作成された保育環境を評価するための尺度集である⁴⁾。文化的な差異はあるが、現在ではアメリカだけでなく世界の各地でアセスメントのために使用されている。

例えば、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」⁷⁾のひとつである「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」

- 1) 文部科学省. 幼稚園教育要領解説. 東京: フレーベル館. 2018
- 2) 厚生労働省. 保育所保育指針解説. 東京: フレーベル館. 2018
- 3) 内閣府・文部科学省・厚生労働省. 幼保連携型認定こども園教育保育要領解説. 東京: フレーベル館. 2018
- 4) テルマ・ハームス, M. クリフォード・デヴィ・クレア (著), 埋橋玲子 (訳). 新・保育環境評価スケール①. 京都: 法律文化社. 2016
- 5) イラム・シラージ, デニス・キングストン, エドワード・メルウィツシュ (著), 秋田喜代美・淀川裕美 (訳). 『保育プロセスの質』評価スケール. 東京: 明石書店. 2016
- 6) Laevers, F. Making care and education more effective through wellbeing and involvement. An introduction to Experiential Education. Research Centre for Experiential Education. Belgium: University of Leuven. 2006
- 7) 再掲1)

5.重症心身障害児と遊び

重症児・者福祉医療施設 ソレイユ川崎 リハビリテーション部
作業療法士
岸本 光夫

はじめに

本稿では、筆者が出会ってきた障害をもつ子どもたちのエピソードを沢山紹介しながら、子どもの遊びとその支援のありかたについて、重症心身障害児（以下、重症児）に焦点を当てて再考したい。そして、身近で自然な遊びを見つめ直し、子どもたちを取りまく生活環境づくりの工夫や遊びのアイデアをできるだけ多く提案したい。さまざまな療育現場での参考にできれば幸いである。

重症児との遊びで 反省させられたこと

図1は、大島分類の1に該当する重症児である。リハビリでは、呼吸摂食機能障害に対して治療プログラムを計画し、ポジショニングの指導も行ってきた。しかし、子どもの能動性を引きだそうと試みているセラピーでは、退屈な姿勢のコントロールと手遊びに嫌気をさしているのか、注意を背けている（図1-a）。一方で、ある時に母親から見せられた動画では、レオと名付けられた子犬が、PT、OT、STの役割を一匹で成し遂げている（図1-b）。筆者には衝撃的な光景であり、子どもの自然な遊びの意味を思い知らさ

れた。子どもは、理屈ではなく、与えられるものではなく、夢中になって遊んでいるときに最も高い能力を発揮するという現実がそこにあった（図1-b）。

同様に図2は、自発運動は極めて少なく、寝たきりで受身的な子どもであった。多量の抗痙攣剤の影響もあり、低覚醒状態が多く反応性に乏しかった。また不規則に現れる覚醒時では、聴覚刺激や移乗介助の際の体性感覚刺激に対し、全身的な緊張で反応してしまい、不快症状を日常的に示していた。訪問時に、呼吸機能障害の管理に対する母親指導を行った後、日常的な子どもと母親との遊びの場面を観察することができた。母親は、「この子は寝ているか緊張しているかのどちらかでいつも困らせてばかりなのですよ」といいながら、子どもに関わりはじめる。しばらくして、ほとんど反応のない子どもに少し焦れた母親が、ぬいぐるみで子どもの顔を触った。子どもは、びっくり反応様に全身で緊張したが、子どもの戸惑った表情はとても可愛らしく、母親と筆者の笑いを誘ってしまう（図2-a）。母親は、子どもの今にも涙が出そうな表情を見て「やめてくれ」、刺激を予測しているようなびくびくしている表情を見て、「また、来るぞ」と子どもの気持ちを代弁するように話し、このやりとりを楽しんでいる。その後子どもが刺

6. 遊ぶことを支援する 遊びの本質と発達を踏まえて

フリーランス 作業療法士
中路 純子

はじめに

障害児者の遊びを考える時には、発達過程にある子どもたちと、成人の余暇活動の双方を視野に入れておく必要があるが、本稿では、発達過程にある子どもたちの遊びを中心として述べることにする。

障害のある子どもたちの多くは、健常児のように、自由に遊びを経験することに何らかの制限がある。だから、療育や支援や治療・訓練という名のもとに、自分ではできない経験を遊びの中で提供したり、一人では十分に遊べない子どもに、何らかの支援をして遊び経験を提供する。しかしそれは、大人が勝手に与えた経験に過ぎないのではないだろうか。ヨハン・ホイジンガ (Johan Huizinga) は、

「すべての遊びは、まず第一に、何にもまして一つの自由な行動である¹⁾」と
言っている。そして、『遊びは「日常の」
あるいは「本来の」生ではない。幼い子
供でももう、遊びというものは「ホント
のことをするふりをするもの」だと感じ
ているのだし、すべては「ただ楽しみの
ためにすること」なのだと知っている¹⁾』
とも言っている。筆者はこの言葉の中に
遊びの本質があると考えている。

リハビリテーション関係者は、「遊び
の中で子どもたちが経験できる心身機
能、社会心理的機能を分析してその有用
性を知ること」と、「子ども達の遊びと
は本来どのようなべきか」という2
つのことに関する知識を持ち、しっか
りと分けて考えることが必要である。そ
して、遊びの場で融合させることが求
められている (図1)。本稿では、遊
びの本質を考え、発達に課題のある子
どもたちの遊びの支援について述べる。

遊びの
有用性

遊びの
あるべき
姿

遊び

遊びの定義と分類から遊 びを考える

遊びの定義を、文化史的な観点から
ホイジンガ¹⁾ は、①自由な行動 ②日常生活
とは別のもの (虚構) ③利害問題とは
関係がない ④日常生活から時間的・空
間的に分離されたもの ⑤一つの固有な

1) ホイジンガ (高橋英夫
訳): ホモ・ルーデンス、
中央文庫、2019

7. 発達相談と遊び 言語聴覚士の視点

旭川大学短期大学部幼児教育学科 准教授 言語聴覚士
子どもの発達支援を考えるSTの会 副代表
熊田 広樹

はじめに

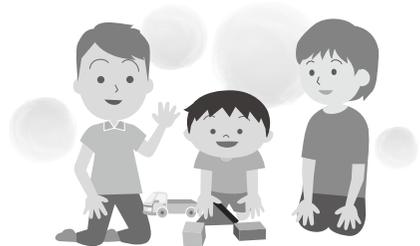
子どもにとって生きることは遊ぶことであり、遊ぶことは生きることでもある。筆者は主に、療育センターでの発達外来、児童発達支援センターでの発達相談および自治体の乳幼児健診やその事後フォローなどをフィールドとして臨床を行ってきた。遊びについての本論に入る前に、まず発達相談の概要と、相談場面における遊びの捉え方について解説する。

1. 発達相談の概要

現在、筆者が行っている発達相談は「ことばの相談」と呼ばれ、自治体の母子保健事業の中に位置付けられている。「ことばが遅い」「発音が気になる」「吃音がある」など子どもの言語発達の途上に見られるさまざまな困り事や心配事を入口にして、乳幼児健診や保育所、幼稚園などから紹介されてくるケースが多くを占める。稀に広報等を読んで、保護者自身から保健師に相談希望の連絡が入ることもある。

事前に保健師とカンファレンスを行い、生育歴や家族に関する情報、保育所や幼稚園など集団場面での様子などを確認する。相談は子どもと保護者が一緒に

部屋に入って実施する。きょうだいと一緒に来ることもある。どのようなケースであっても、まず子どもと遊ぶことから始め、様子を見ながら途中で簡単な検査課題などを実施することもある。なるべく遊びに保護者を巻き込む場面を意識的に作り、親子の関係性や距離感などもさりげなく観察する。子どもが喜んだり、興味深い反応を示してくれた時などに、「こういう遊びが好きなんですね」などと保護者に話しかけてみると、家での最近の出来事などを自ら語ってくれることもある。そのようにしながら遊びの中で見られた子どもの行動と、母親からの情報、保健師からの事前情報を統合し、子どもの発達の全体像を見立てていく。相談時間は概ね1時間30分程度のことが多い。ケースにもよるが、時間配分としては前半2/3で子どもと遊び、後半1/3を保護者とお話にて充てることが多い。相談終了後は、記録をまとめ、保健師と事後カンファレンスを実施し、今後の方針を確認する。



口腔機能発達不全症を伴う 高機能自閉スペクトラム症児に対する 口輪筋トレーニングの効果

Effectiveness in strength training of the orbicularis oris muscle for high-functioning autism spectrum disorder with developmental oral dysfunction

第2北総病院附属小児リハビリテーション事業所さざぐるま
(福祉型児童発達支援センター・放課後等デイサービス)¹⁾
第2北総病院リハビリテーションセンター²⁾
第2北総病院小児科³⁾

[著者]

言語聴覚士 本間 友美^{1,2)}言語聴覚士 塚田 茉友^{1,2)}言語聴覚士
所長 星山 伸夫^{1,2)}小児神経専門医
センター長 鈴木 文晴^{1,2,3)}

はじめに

自閉スペクトラム症児（以下、ASD児）は、定型発達児に比べて高い割合で食事場面における問題を有することが明らかとなっており、従来から指摘されている偏食や食行動といった問題だけではなく、摂食機能や食べ方においても支援が必要とされている¹⁾。特に口唇閉鎖機能については、食具から口唇を使って食物を取り込む捕食機能や、咀嚼中の口唇閉鎖の未熟さが報告されている²⁾。ASD児の摂食に関する問題に対してはそのような口腔機能の未熟さを含めた総合的なアプローチが必要であるが、先行研究^{1),2)}の多くは知的障害（以下、ID）を併存するASD児を対象としており、IDを併存しない高機能ASD児（以下、HFASD児）に関する摂食機能や口腔機能の知見は少ない。HFASD児の摂食機能の問題の発現頻度は、IDを併存するASD児に比べると低いと、捕食・咀嚼な

どの摂食機能の問題を示す児が存在することが報告されている²⁾。さらに、日本歯科医学会によると“口腔機能発達不全症”とは、「食べる機能」、「話す機能」、「その他の機能」が十分に発達していないか、正常に機能獲得ができておらず、明らかな摂食機能障害の原因疾患がなく、口腔機能の定型発達において個人因子あるいは環境因子に専門的関与が必要な状態³⁾とされており、臨床場面では口腔機能発達不全症を合併するASD児が多く存在する。

HFASD児への摂食機能を含めた口腔機能へのアプローチにおいては、感覚過敏や感覚回避・防衛反応などの障害特性から身体的接触や徒手的コントロールに拒否的であったり、言語指示によって特定の筋を意識的かつ努力して収縮させるといった自動抵抗運動訓練の実施に難渋することは少なくない。また、ASD児の口唇閉鎖機能について定量的に評価した報告はなく、介入基準となる指標も明らかになっていない。

そこで今回、当院附属児童発達支援センター